

保育計画成果報告書

法人名等	学校法人 聖ルカ学園
施設名	認定こども園 聖ルカ幼稚園
報告者（役職）	橋本美恵子（園長）
住所・連絡先	福井県小浜市千種2丁目9番22号
	☎ 0770-52-0995 E-mail Info@seiurka.ed.jp

○タイトル（保育計画）

乳児期からの運動遊び

○主な助成備品

八角ジム、マット、平均台（低年齢児用4台）、鉄棒（低年齢児用2本）

1. 保育計画(新規事業計画)策定の目的

約20数年前、子どもたちの運動能力の低下や、生活をする上で大事な筋肉が育っていないことに危機感を持ちました。それは、散歩に出かけた時には「疲れた」「もう歩けない」という子どもが多いこと、細い土手道が怖くて渡れない、外遊びの砂場ではしゃがめないことや、転んだときに手が出ない等の怪我也絶えませんでした。

また、そのころ当園の卒園児が小学校入学後の連絡会で「体力がない」と指摘を受けたことも事実でした。子どもが生きていく中で体作りは大事です。そこで、当園の取り組みとして早速、運動遊びやリズム運動の取り組みを強化できる園のカリキュラムを新たに策定し、子どもの体作りを目標に歩みました。

また、2020年に認定こども園に移行したことで、乳児期の運動器具が必要でした。

しかも、できたばかりの園庭は運動遊具が雲梯と鉄棒だけしかなく、以上児にとっても十分な環境が整えられておりませんでした。

今回、第一生命財団のお力添えをいただいたおかげで色々な運動器具が導入できたことや、乳児からの運動遊びができるような環境ができたことは大きな喜びです。

日常の生活の中で、十分に体を動かし、環境が整った中で仲間と一緒に運動する喜びを感じられるように願いを込めて計画を策定致しました。

2. 具体的な実施内容

【八角ジム】

木登りをする感覚で、友達と樹上で互いを意識し共感性が高い運動遊具で天気のいい日は、毎日のように遊んで欲しいことから、園庭に八角ジムを設置しました。

初めて使う日に、運動指導の先生に八角ジムの使い方や楽しみ方を学びました。勝手にどんどん登るだけではなく、ルールを決めることで安全に更に楽しくできます。色別にペイントされているので、「赤色階段から登る」「緑色の棒から滑り降りる」など、色を見つけて工夫しながら遊べることや、友達と何色にするか相談できることもいいところです。登っては降りることに達成感があり、繰り返し子どもたちは楽しんでいきます。



【マット】

色別のマットを購入することができました。マットを使ってチーム別にゲームをしたり、色が変わったところで、違った運動を展開できたり、〇〇色でゴールできることが視角から入れ、運動遊びが色々と工夫できます。衝撃吸収性が高いことで、裸足での感覚が心地よくジャンプ、横転、前転、ステップが安心してできることが、子どもたちの心を前向きにしてくれているようです。軽量であるため、持ち運びが楽であることから、運動会でも使用しました。



【平均台】

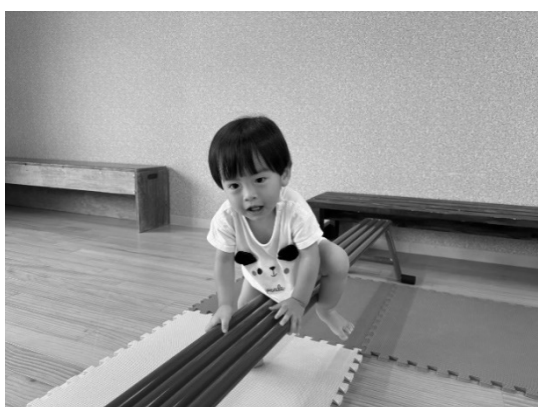
これまで、幼稚園の平均台は高さ 35 cm の幼児用のものはありませんでしたが、乳児がこの平均台を利用するときは、保育教諭が補助的に手を持ってあげないと危険です。

補助的に手を持ってもらうのは、乳児自身の達成感や運動機能が十分に発達しません。

そこで今回高さ 25 cm の高さの平均台を 4 本購入できたことで、乳児が保育教諭の補助をかりず、意欲的に取り組める環境が整いました。

ホールでは、平均台が加わったことで運動遊びが広がり、サーキット遊びに発展しました。

下記の写真は 1 歳と、2 歳児です。

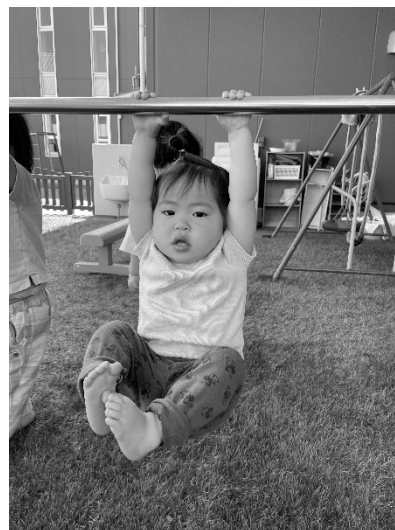


【鉄棒】

今回の応募したときに、運動器具は乳児が使えるものが欲しいと感じていました。

この鉄棒もそうです。

乳児は、ぶら下がることが大好きです。全身運動にもなることから、いつでも使えるように乳児保育室横のテラスと園庭に設置しました。



3. その成果と評価

乳児期から、遊びの環境の中に運動器具を設置し、いつでも使えるようにできたことで、喜んで体を動かす姿がみられました。

自分でやりたい運動器具を選択できることも大きな利点です。

以前、乳児は鉄棒や平均台をやりたくてもチャレンジできないことがありましたが、今回の助成金によって、運動器具が揃えられ自ら取り組む姿が見られ嬉しく思いました。

また、八角ジムや、平均台では特に危険回避能力もつき、危ないことに予測を立て、自己コントロールする力は、生きる力にも繋がると感じています。

このように運動遊びによって、心身の発達を促すことはもとより遊びが学びとなり、成功や失敗をすることで「できること」「できないこと」を学び、困難な状況を克服するレジリエンスを身に付けられています。

また自ら挑戦し、やり遂げた時の喜びは大きく、今回いただいた遊具からは子どもたちのいい笑顔や表情がたくさん見られました。

4. 今後の課題と展望

運動遊具から「群れて遊ぶ」ことの楽しさや友達と共感できる遊びの時間をとれたことで、異年齢との交流は、遊びの中で仲間関係も広がっています。

小さい組は、大きい組の運動に憧れ、更に意欲的になったりし、お互いに高め合う仲間となれば嬉しいです、大きい組は小さい組の子どもたちを思いやったり、応援したりする温かい関係性を今後も築いてほしいと願います。

運動は、体力、運動能力、認知能力は勿論のこと、非認知能力（粘り強く頑張る気持ち、達成感、集中力等）が育っていることから「体を動かして遊ぶ楽しさ」を体感しつつ、共に育ち合える環境については今後も継続して取り組みたいと感じています。

また、今回乳児期から取り組める運動遊びの環境を助成金によって整えられたことで、一人ひとりの成長、発達について理解できたことや個々の課題も見えました。

「運動すること、体を動かすことが楽しい」と感じる環境作りが乳幼児期から大切なことを職員で共有し、学んでいきたいと感じています。



以上